

生涯学習社会に向けての 生涯学習システムとしての地域生活文化

—山形・黒川能を支える人々の生活史研究をモデルとして—

梅澤佳子（日本航空レジャーライフ研究所研究員）

キーワード：生涯学習・地域生活文化

1. はじめに

人生80年時代を迎えて、「生涯学習」「生涯学習社会」という言葉がクローズアップされてきている。これらの概念は従来の社会教育とどう違うのだろうか。これまで「生涯教育」という概念が使われてきたが、生涯教育と生涯学習をどうとらえたらよいのだろうか。

従来の生涯教育は、学校教育＋社会教育と考えられてきた。しかし、今日言われている生涯学習は、これまでの生涯教育と次の点で基本的に異なると考えられる。第1に人生50年時代は、労働に対応する能力開発に重点がおかれてきたが、これからは労働の能力開発に加えて自由時間に対する能力開発も重要になってくる。次に人生80年時代においては、労働時間は人生の1割まで短縮し、自由裁量時間は3割まで拡大するといわれている。¹⁾生活時間構造が変化してくると、これまでのリニア型のライフパターンからリカレント型のライフパターンへの選考が強まってくる。²⁾第3に、生活時間構造が変化してくると国民一人一人にとっても、仕事の能力開発に加えて自由時間を充実して生きる能力開発が重要になってくる。第4に、一般に自由時間の過ごし方として、休息・休養型、気晴らし・娯楽型、自己開発型があると言われているが、³⁾⁴⁾どのライフステージにおいても、自己開発型に対する国民のニーズが高まってきており、それに答える新しい学習支援システムを整備することが急務となってきている。以上のような変化を捉えて、文部省は昭和63年に社会教育局を生涯学習局に改め、明治以降からみると3回目の大きな教育の革新をはかろうとしている。¹⁾²⁾経済企画庁国民生活局：『人生80年時代における労働と余暇』

生涯学習社会に向けての生涯学習システムを整備するには、まず人生80年それぞれのライフステージにおいて、自己開発をはかれるような支援システムを作ることである。そして、学校教育もその中に位置付けられるべきものであろう。従来の所与としての学校教育に、公民館活動を中心とした社会教育を付け加え、それを生涯教育とするのではない。人生80年全体の生涯学習支援システムが整備されるべきである。人生80年にわたってどのような生涯学習支援システムが望ましいのだろうか。今後この課題に向けていろいろな視点からの調査研究が行なわれることになると思うが、私は日本的な生涯学習のあり方を探るために、1つの事例研究から入ることにした。³⁾⁴⁾アリストテレス・J.デュマズディエ

2. 山形・黒川能の事例研究

山形県東田川郡櫛引町黒川は、山形県の日本海側に面する庄内平野の南部に位置する。東に鳥海山、そして羽黒山・月山・湯殿山を含む出羽山脈に囲まれ、自然に恵まれた土地である。また古くから都との交流が盛んであり、山岳宗教でも信仰の深い文化的な環境にある。その黒川は約500年にわたって伝統芸能（黒川能）を伝承し続けている。黒川能は春日神社の宮座を兼ねた上座・下座、2つの座の人々によって演じ継がれてきたものである。彼等は専業能楽師ではない。農村の人々が氏神様である春日神社への信仰を支えに、彼等の生活の中で伝えてきた地域生活文化である。現在では歳時季にあわせて年に6回の

演能が行なわれている。それは奉仕・奉納と、近郊地域の普及を目的としたものがある。その中で最も重要な祭りは、2月1日から2日(旧正月)にかけて行なわれる王祇祭りである。春日神社からご神体の王祇様を2つの座の当屋にそれぞれお迎えして、王祇様、当屋の当人、村人が集まり、夜を徹して行なう祭りである。祭り独自の精進料理が用意され酒を汲み交わしながら、能楽が演じられる。黒川は両座あわせて400番以上の演目を持っている。その中からその年の祭りの演目が選ばれ、敵しい稽古の後に役者たちによって演じられる。そして老若男女、すべての村の人々によって享受されるのである。王祇祭りの儀式は、1月3日の興行から始まる。しかし祭りの準備は、その年の王祇祭りがつつがなく終わった翌日、来年の当屋に引き継がれた時に、既に始まっているのである。山菜採り、花作り、薪割り等、祭りの準備は1年を通して行なわれるのである。

3. 黒川の生活史から

出羽の国の人々の生活は、出羽三山の山岳信仰を抜きにしては考えられない。空海によって真言宗が開かれた羽黒山・月山・湯殿山の三山は、過去世、現世、未来世を救う仏様の山である。我々は後悔に満ちた日常の生活を清算し、生まれ変わることができる。そんな死と再生の山々である。出羽の国は、このような神々に守られていた。そして人々の1年間のサイクルも、この山岳宗教の祭事にあわせてできていたのである。一方で出羽の国が、庄内平野有数の穀倉地帯であったことを忘れてはならない。この経済的な豊かさが、物質的なものばかりを求めるのではなく、より豊かな生活を送るためには文化の享受が大切であることを受け入れるゆとりを生んだのである。

黒川は、この豊かな文化的背景、経済的基盤をもつ出羽三山のまさに懐に位置する地域である。黒川能を伝承してきた地域の人々の心の中には、出羽三山の仏様(神々)に支えられているという思いがある。*この宗教心の潜在的な支えが、能を500年にわたって存続させてきた原動力であったといえる。能を存続させてきたのは、地域の人々一人一人である。「能をやる」という事が地域のアイデンティティであり、自分自身のアイデンティティを確立するという事でもある。*

さらに黒川の伝統芸能である「能楽」そのものに、深めていく価値がある。能の番組にはそれぞれに人間味の込められたストーリーがある。能というフィクションの世界に身をおき、その世界が深まると、人生における能の意味がわかってくる。また能を演じることで、能の享受は個人のレベルをこえて、村での共通の楽しみになっていくのである。*

4. まとめ

王祇祭りは黒川における「ハレ」の舞台である。この日のために「真面目」な日常生活に励む。そして日常から切り離された祭りの舞台で日々稽古を積んだ自分を出しきる。それは仕事や学校で勉強をする日常の自分とは異なったもう一人の自分である。フィクションの世界でさまざまな疑似体験をし、違った自分が引き出される。これが人間性を深める、人間が全体に向かうということであろう。そして「もう一人の自分」を开花させた思いが、日常のあり方をも包み込む。それは自分自身にとっての価値ばかりでなく、地域全体の支えにもなる。豊かな文化的背景、経済的基盤のもとに、村の人々が「能楽」という普遍的な価値に根ざした文化の世界の中で自己開発していく。このような地域生活文化こそが、これからの生涯学習社会に向けての支援システムのあり方の有効なモデルといえるのではないだろうか。

*印は、学会発表時に生活史の中から事例を紹介する。